

十個のダイヤモンドをつけた人物の夢

サン・ペニーニオ・カナヴェーゼ。1881年9月10日から11日までの夜に起きたこと。

※ ここに発表する本文は、ベルト神父が清書し、ドン・ボスコ自身、これに訂正を加えたものに、ドン・ボスコ自筆の最初の原稿と照合したものです（サレジオ会本部書類記録132・夢の部五）。

扶助者聖母会員チェチリア・ロメロの発行による批制版（「ドン・ボスコの夢——批制版」、トリノ市一九七八年L・D・C発行社）も参考にしました。

これについては、また、次のようなこともしました。

——ラテン語による言葉を翻訳しました。（総会長ジジョッティ神父がこれを発行した時のように）。

——すでに過去の物となったある年号を省きました（ドン・リナルディが二回目の発行をしたときのよう）。

——適当と思われる題と、幾つかの副題を加えました。これは、この本文を印刷術の点から見ても、もっと読み易くするためです。

※ 聖霊の恵みが、わたしたちの知恵と心を照らして下さいますように。アーメン。

サレジオ会の教訓のために。

1881年9月10日、教会が聖母マリアの光栄あるみ名に捧げたあの良き日、サレジオ会員は、サン・ベニーニオ・カナヴェーゼの家に集まって、黙想会をしていました。

まことのサレジオ会員像

10日の夜から11日の朝にかけて、わたしは、夢の中で、美しく飾られた大広間を見ていました。どうも、その中を本会支部の院長らと一緒に歩いているように思われました。

しばらくすると、見るのも、恐れ多いほど気高い姿をした人物が表われたのです。その方は、黙ったままわたしたちを見て、数歩、歩み寄って来ました。

なんと素敵なマントを着ていることでしょう！首の近く、前に襟のような細い布があり、胸にはひもが垂れ下がっています。

その細い布の上には、輝く文字で「サレジオ会」と書いてあり、ひもには、「いかにあるべきか」と書いてあります。

マントにはめ込まれた非常に大きなダイヤモンドの輝きは、まばゆいほどで、わたしたちは、そのため、この尊い人物を見つめる事ができないほどでした。

そのダイヤモンドのうち、三個は、胸にあります。その中の一つは「信仰」、もう一つには「希望」、そして、心臓のあたりにあるダイヤモンドには、「愛徳」と書いています。

四番目のダイヤモンドは、右肩の上で「労働」と書いています。そして、左肩の上のダイヤモンドには、「節制」の言葉が読めます。

ほかに五つのダイヤモンドがマントの後を美しく飾っています。真中の一番大きく、いなずまのように輝くダイヤモンドは、四つの砦を持つ四辺形の要塞の中心であるかのように見えます。そこには、「従順」と書いています。

右側の上のダイヤモンドには、「清貧の誓願」、右側の下のダイヤモンドには、「報い」と書いています。更に左側の上のダイヤモンドは、「貞潔の誓願」という言葉が書いています。このダイヤモンドは、特別な光を放っていて、見つめていると、まるで磁石が鉄を吸いつけるように、わたしたちの視線を集中させるのです。そして左側のダイ

ダイヤモンドに書いているのは、「断食」という文字です。この四つのダイヤモンドは、みな、真中のダイヤモンドにその光線を放っています。

これらの宝石は、光線を放って、炎のように燃えあがり、しかも、この炎でいろいろな格言が書いてあるのです。

「信仰」のところには、「悪魔のわなに勝つために、信仰の盾をとれ」という言葉があります。他の光線には、「行いのない信仰は、死んだ信仰である。み言葉を聞くだけでなく、それを守る人が神の国を所有するであろう」とあります。

「希望」の光線の中には、「人間ではなく、神に希望しなさい。あなたたちの心は、いつも真の喜びを求めるように」と。

「愛徳」の光線の中には、「私の“おきて”を守りたいなら、お互いの荷を負いなさい。愛しなさい、そうすれば愛されるでしょう。自分の靈魂と他人の靈魂を愛しなさい。聖務日課を信心深く唱えなさい。ミサ聖祭を注意して捧げなさい。また、愛をもって、もっとも聖なる聖体のイエスを訪問しなさい」と書いています。

更に、「労働」の言葉の上には、「情欲に打ち勝つための手段、悪魔のあらゆる誘惑に打ち勝つための力ある武器」とあります。

「節制」のところには、「薪を取り去れば、火は消えます。あなたの目と、喉と、睡眠と契約を結びなさい、これらの敵があなたたちの魂を奪い取ることがないように。不節制と貞潔は共存することはできません」と。

「従順」の光線の中には、「従順は聖性の土台であり、その完成です」と。

「清貧」の光線には、「天の国は貧しい人のものです。富は茨です。清貧は、言葉だけでなく、愛と実行を持って生活に生かすべきです。清貧は、天国の門を開きます」と。

「貞潔」の光線には、「この徳は全ての徳を伴います。心の清い人は神の奥義を見抜き、神ご自身を見ます」と。

「報い」の光線には、「大きな報いを望むなら、それを得るための多くの苦労を恐れてはなりません。わたしと共に苦しむ人は、他日、わたしと共に楽しむでしょう。この地上の苦しみは短いが、わたし《=神》の友人が受ける喜びは、永遠に続くでしょう」と。

「断食」の光線には、「悪魔のわなに勝つ強力な武器。全ての徳を守る歩哨。断食は、あらゆる種類の敵を追い払います」と書いています。

権威ある忠告

マントの下の方にあるバラ色のふちどりに、こう書いてあるのが読めます。

「これらのことを毎日、朝・昼・晩の説教のテーマにしなさい。善徳の小さな行いを、おろそかにしないように。そうすれば、聖性の大きな建物を建てることができるでしょう。小事を軽蔑する人こそ災いです。その人は少しずつ亡びに向かう」と。

この時まで、院長たちは、あるいは立ち、あるいは跪いていましたが、みんな驚きのあまり、言葉も出ません。ついにルア神父が、はっとして、言いました。「忘れないように書き取らなければ」と。

でも、いくら探してもペンが見つかりません。財布まで持ち出して、振ってみましたが、鉛筆一本も見つからないのです。仕方なくドゥランド神父が「わたしが、よく記憶しておきましょう」と言いました。

ファニャーノ神父は、「わたしは書きたい」と言って、バラの花の茎で書き始めました。みんなは、かれが書いていることを見てよく理解しました。

しばらくして、ファニャーノ神父が書き止めた時、コスタマーニャ神父がそのあとを引き受けて言いました、「愛は、全てを理解し、全てを耐え忍び、全てに勝つ。このことを、言葉と行いで教えましょう」と。

まことのサレジオ会員の正反対

ファニャーノ神父が書いている最中、光が消えて、真っ暗になりました。その時、ギヴァレツロ神父が「しいっ！ 静かに。跪いて祈りましょう。そうすれば、明るくなるに違いありません」と言ったので、ラサーニャ神父が、すぐ、「ヴェニ・クレアトル」（聖霊に対する祈り）と、「デ・プロフンディス」（死者のための祈り）と、「マリア・アウクシリウム・クリスティアノールム」（キリスト信者の助けなる聖マリア）の祈りを始めました。みんなは一緒にこれに応えました。そして、「オーラ・プロ・ノービス」（わたしたちのためにお祈りください）と言った所で、再び光が射し、一枚の紙が照らし出されました。そこにある言葉を読むと、「危険の差し迫るサレジオ会」と書いています。

一瞬のうちに光は増し、お互いの顔がはっきり見えるほどになりました。光の中には、あの気高い人物が再び現れていました。でも、なんという変わりようでしょう！その顔は憂い満ち、涙を流さんばかりに悲しげです。マントは色あせ、破れて、しわだらけになっています。前にダイヤモンドが輝いていた所には、幼虫といろいろの小さな虫が穴を食い破っています。

「御覧なさい、そして、よく理解しなさい」とその人物は言いました。

私は、十個のダイヤモンドが、たけりくるう幼虫に変わっているのを見ました。それぞれの個所に書かれている言葉が読み取れます。

信仰のダイヤモンドの代わりに、「惰眠と怠惰」、希望のダイヤモンドの代わりに、「下品な笑いと野卑な言葉」、愛徳のダイヤモンドの代わりに、「聖務をなおざりにし、イエス・キリストのことを求めず、自己満足を求めること」。

節制のダイヤモンドの代わりに、「貪食。かれらの神は、自分の腹である」と書かれています。

労働のダイヤモンドの代りには、「惰眠とおしゃれ、暴飲と金銭欲」。

報いのダイヤモンドの代りには、「われらの遺産は財産である」と。

断食のダイヤモンドの代りには、破れ目の他に何も書かれていません。

みんなは、あまりのことに驚き、中でも、ラサーニャ神父は気絶しました。カリエロ神父は、白いシャツのように青ざめ、椅子に倒れながら叫びました。「もう、こんなになってしまった！」と。

ラッゼーロ神父とグイダーツィオ神父は、倒れないために、互いに体を支えあっているしまつです。フランチェジヤ神父と、カイス伯爵、バルベリス神父、レヴェラット神父は、跪いてロザリオを手に祈り始めました。

その時、一つの陰気な声が言いました。

「ああ、なんということ、もとの美しい色が消えてしまった！」

ひとりの若者のメッセージ

闇の中に、不思議な現象がおきました。突然、本当の暗闇が襲ったかと思うと、まもなく、真中に美しい光が射し始めました。きらきらと輝きながら光がしだいに人間の姿をとり始めたのです。

じっと見つめる事もできないほど、輝く美しい若者です。金銀の刺繍がある白衣の裾は、キラキラと輝くダイヤモンドで飾られています。厳かではあるが、それでいて、親しみ深い表情をたたえて、その若者は、わたしたちに近づいて来ました。かれは、口をきき始めたのです。

「全能なる神の、僕であり、道具である者たちよ、耳を傾けて理解しなさい。勇敢で、雄々しくありなさい。今、あなたたちが、見聞きした事は、みんな、天からの忠告です。この忠告は今、あなたたちと、あなたたちの兄弟のために示されました。だから、よく注意して、しっかりと、言われていることを理解しなさい。

予見した打撃は、小さな傷しか与えません。それに、これを予防することができます。

ここで示された考えが、全て説教のテーマとなるように、よいおりがあろうと、なかろうと、絶えず説教しなさい。

でも説教することを自分でも絶えず行なってください。こうして、あなたたち自身の行いそのものが、光となるように。また、この光が健全な伝統の形をとって、あなたたちの兄弟と子らを代々に照らすように。

よく聞いて、理解して下さい。修練者を受け入れるときは、慎重に、そして強く養成しなさい。入会をゆるすに当

たつては、賢明にし、みんなを試して、よい人だけを受けなさい。軽薄な人や意志の変わりやすい人は、除外しなければなりません。

朝晩の黙想は、絶えず会憲についてされますように。もし、こうするなら、全能なるお方の助けは、決してなくなることはないでしょう。あなたたちは、この世と天使たちの前で、手本になるのです。

“このことは全て、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議です”と。あなたたちについて人々が言うことでしょう。その時こそ、あなたたちの兄弟と子らは、みんな一緒に歌うのです。

“主よ、栄光を帰せよ。われらにではなく、われらにではなく、あなたのみ名に”（詩篇 115・1）と。

この最後の言葉は、歌声になりました。そして、話していたその若者の声に、他の大勢の声が加わって来ました。その声は、調和と美に満ちていたので、わたしたちは、感動のあまり気を失わないため、一緒になって夢中に歌い始めました。

歌が終わったとき、光は消え、暗くなり、そこで私は、目が覚めました。朝になっているのに気づきました。

ドン・ボスコの覚え書

この夢は、ほとんど一晩中続きました。朝になった時、非常に疲れを感じました。でも、わたしは、忘れたくなかったので、すぐ起きて、幾つかのメモをとりました。

聖母が神殿に奉獻された記念日、わたしはこの夢を書きましたが、その時、このメモは、たいへん役に立ちました。

もちろん全部を思い出すことはできませんでしたが、それでも、わたしが確実に悟ることができた多くのことで、どれほど主がわたしたちに、憐れみを示しておられるが分かります。

本会は、天から祝福されたものです。それにしても、主もまた、わたしたちの方からの協力を望んでおられます。

ここに述べてきた善徳や悪徳について、わたしたちが説教するなら、注意されたあの損害は予防する事ができるのです。しかしそれは、わたしたち自身、説教することを実行して、これまでになされたことや、これからなされねばならないことに関する実践的な伝統を、本会の兄弟たちに伝えるという条件のもとにです。

キリスト信者の助けなる聖マリア、わたしたちのためにお祈りください。

サレジオ会総長

エジディオ・ヴィガノ師の手紙

ダイヤモンドを身につけた

人物の夢にあらわれる

サレジオ会員像

サレジオ会最高評議会広報第 300 号

(1981年4月16日)

会員のみなさん

今年スペインのサレジオ会員は、スペインにおけるサレジオ会活躍の百年祭を祝っています。わたしたちも、スペイン会員の喜びと希望に加わりましょう。

この百年祭は、2月16日に始まり、今年いっぱい続きます。

ちょうど百年前、第4回宣教師派遣が行われました。これと同時に、团长ヨハネ・ブランド神父は4名の司祭とひとりの修道士を伴い、トリノ市を出発しました。スペインで最初に支部を開いたのは、アンダルシア地方のウトレラ市です。このとき、かれらに同伴して、指導したのは、ラテン・アメリカに、すでに5年もの支部開設の経験をもっていたあの勇敢なカリエロ神父でした。

今日、スペインは、あわせて3200名をこえるサレジオ会員と扶助者聖母会員がいます。

それだけではありません。今度は、スペイン自身布教地に男女のサレジオ会員を数多く派遣しています。その他、協力者や卒業生の数が万をこえ、ヴォロンタリエ・ディ・ドン・ボスコのメンバーも加わり、スペイン全国に散らばったサレジオ会家族は数えきれないほどです。

スペインの最初の会員6名は、ドン・ボスコの心を心とするあのヴァルドッコのサレジオ会員で、豊かな実りを得るための秘訣と未来への勇敢な希望をじゅうぶんに身につけていました。

さて、わたしたちは、スペインのサレジオ会員が、かれら先駆者たちの精神であるこの秘訣を、これほどまでに直感し、理解したことを心から祝福したい気持です。

しかし、それと同時に、この喜びにみちた百周年記念を機会に、最初のあの当時から、今日にいたるまで、これほど見事にまことのサレジオ会員のモデルを実現させた秘訣を、深く掘り下げたいと望まないではいられません。

このために、サレジオ会にとって、非常に意味深いもう一つの記念祭を注意深く反省することは、非常に有意義だと思えます。そのもう一つの記念とは、今年の9月に記念される百年前に聖ドン・ボスコがみた有名な夢です。

この夢には、“尊いひとりの人物”が現れますが、その人のマントは、非常に豪華で十個の大きなダイヤモンドが光っていました。すなわち、かれがサン・ベニオ・カナヴェゼで、1881年9月10日から11日の夜に見た夢です。

まことのサレジオ会員のモデル

この夢が展開される場面を三つに分けることができます。

第一の場面では、この人物は、サレジオ会の長を表現しています。マントの前に輝いている三つのダイヤモンドは、信仰・希望・愛徳を示し、肩の二つのダイヤモンドは、労働と節制を示しています。

また、マントのうしろについている五つのダイヤモンドは、従順・清貧の誓願・報い・貞潔の誓願・節制を意味しています。

リナルディ神父は、この人物こそ、“まことのサレジオ会員のモデル”であるといっています(1)。

第二の場面で、この人物は、モデルの墮落を示しています。そのマントの色はあせ、虫にかまれて破れ目が見えます。特にそれが目立っているのは、前にダイヤモンドがはめこまれていた箇所です。大小さまざまな虫にかみ裂かれた大きな裂け目がありました。この悲劇的な場面こそ、「まことのサレジオ会員の正反対の姿」、いわゆる「偽サレジオ会員」(2)を示しています。

第三の場面では、金銀の糸で織られた純白の服をまとった美しい若者が現われます。かれの姿には、荘厳さの中にやさしさと、可憐さがあり、一つのメッセージをもたらします。すなわち、サレジオ会に向かって、このように励ましています。

「よく聞き、よく理解してください。言葉と行いをもって、みずからあかし人であってください。強く、勇ましく振る舞い、新しい世代を受け入れてください。かれらを養成するにあたっては、細心の注意を払うように。こうして、サレジオ会が健全な成長をとげるようにしてください」と。

この夢は、三つの場面がどれもみな生き生きとした姿をとって、わたしたちに迫ってきます。それこそ、サレジオ会的靈性のわかりやすく、ドラマチックな総合を提供するものといえましょう。

この夢の内容が、わたしたちのアイデンティティーを定めるために重大な意味があるとドン・ボスコは考えたに違いありません。なぜなら、この中に、サレジオ会員のあるべき姿が示されているからです。その証拠に聖ドン・ボスコ

は、サレジオ会員が教会における使命を立派に果たすためには、これらサレジオ会の長を大切にしなければならないと言っています。

またかれは、この夢を話しながら二つのことに注意を促しました。一つは、教会が9月10日を聖母マリアの光栄ある聖名に捧げたことです。※

注——1683年9月13日、キリスト教軍隊がウィーンでトルコ軍に対し、大勝利をえた記念として、教皇福者インノチェンシオ十一世は、マリアのみ名の祝日を定めた。当時、この祝日は、聖母ご誕生（9月8日）の次の日曜日であった。ところでドン・ボスコがこの夢を見た1881年のその日は、この日曜日がちょうど9月10日にあたっていたのである。しかしこの世紀に入ってから、聖ピオ十世教皇によって、マリアのみ名の祝日は、9月12日に変更された。

もう一つのことは、あの年、サレジオ会員はサンベニニオ・カナヴェゼの支部で黙想会を行っていたが、夢の中でドン・ボスコは、この黙想会に集まった院長たちといっしょに歩いていたということである。

さて、この二つがわたしたちに反省をうながすのは、次の点です。

まず、ドン・ボスコのあの夢が聖母マリアと深いつながりを持っていること。また、そのテーマが黙想会のような、いわゆる“強いひととき”にふさわしいものであるということである。

この夢のなかで若者が直接登場しないことから、そのねらいは、サレジオ会員自身にあります。それでわたしたちは、この心がまえをもってこの夢を研究していきましょう。

ドン・ボスコはこの夢を大切にしたい

この夢がいかにドン・ボスコに大きな印象を与えたかは、かれがこれを話すだけで満足せず、文章に書きとめたことをみても分かります(3)。

書類保管所にドン・ボスコ自身による原文が残っています。チェリア神父がドン・ボスコ伝の第15巻を編さんしたときは、まだこの原稿を見つけていませんでした。最近になって、ひとりの扶助者聖母会員が忍耐をもって研究した結果、この原稿を見つけ、その批判版を発行しました。

注——夢をみた当時、聖ドン・ボスコが、自分の教育事業と修道会を再検討していた時代であったともいえる。かれの修道会は、その当時にとどまらず、未来においても、教会と社会の期待に応えるだけの力をそなえねばならなかった。こうした必要にせまられて、聖ドン・ボスコは、「オラトリオの回想録」（1873年—1875年）と「予防教育法」の小冊子（1887年）を書いているが、かれが、ダイヤモンドの夢と1870年—1887年に見た他のいくつかの夢をとくべつに文章にしたのも、同じ理由のためではないだろうか。なぜなら、これらの夢が、その内容からしても、また、夢を見た当時の状況からしても、心理学的に、教育学的に、また、神学的・歴史的に、つまり、あらゆる面において意味を有するからである。

ドン・ボスコはこの夢をみた数週間後に、これを自分で記録しているが、それは、会員に、この夢を正確に伝えて、これを実生活に反映させたかったためであろう。

原稿には、訂正した箇所が多々あります。発行の段階でドン・ボスコが手をつけた他の原稿にも、この訂正があります(4)。この点から見ても、どれほどドン・ボスコがこの夢をみたことを正確に伝えようと努力したかが分かります。

かれは、この夢が天からのメッセージであると悟ったのです。それで、夢を書き始めるにあたって、「聖霊の恵みが、わたしたちの知恵と心を照らしてくださいように。アーメン」と書いて、これに、神秘的な荘厳さと予言的な次元を与えています。

訂正だらけのドン・ボスコの下書きをベルト神父が清書し、ドン・ボスコはこれに次のようなことを後書きとして加えました。

この夢は、ほとんど、一晩中続きました。朝になった時、非常に疲れを感じました。でも、わたしは忘れなくなかったので、すぐ起きて、いくつかのメモをとりました。聖母が神殿に奉獻された記念日（11月21日）、わたしは、この夢を書きましたが、そのとき、このメモは大変役に立ちました」と。

では、聖ドン・ボスコが、どのようにこの夢を取扱ったかを考えて見ましょう。

まず、すぐにメモをとっています。そのあと、自分で本格的に書いています。これこそ、かれがこの夢を大切に考えていたしるしではないでしょうか。またその中には、「全部を思い出す事が出来なかった」と記していますから、本当は、夢がそこに書かれているよりも、もっと長かったことが分かります。そのうえ、かれは聖母の祝日にこの夢を書いたといっていますから、いかに聖母との関係が強調されているかが伺えます。

ドン・ボスコが、この夢を忘れてしまわないように、これほど心を配っているのを見て、チェリア神父は、この夢を「非常に大切な夢の一つである」（5）と結んでいます。

本会の伝統におけるこの夢の重要性

サン・ベニニオ・カナヴェーゼの支部には、ドン・ボスコがこの夢を見たその部屋とベッドが、今もそのまま保存されています。

その夢の後、まもなくサレジオ会では、夢の内容を反省して生活を改め、新会員を養成するために利用しました。印刷された初版には *Futura Salesianorum Societatem respicientia* 「サレジオ会に関する未来のことがら」という題をラテン語で書いています。

この夢の内容は、説教に、また特に黙想会にしばしば使用されるようになりました。

アルベラ神父は、1920年の有名な一つの回書の中に家庭的なテーマとしてこの夢を扱っています。この回書全体のテーマが、「わたしたちの模範であるドン・ボスコ」（6）となっているのも意味深いことです。

リナルディ神父は、この夢について、たびたび話しましたが、最高評議会広報（7）のなかにも数回にわたって書いています。それだけではありません。かれは、この夢を特別に印刷して、1924年（8）と1930年（9）の2回にわたって発行しています。最初は、先に述べた原文をそのまま、二度目は、本文に出るラテン文をイタリア語になおしたり、不必要と思われるある日付を消したりしています。しかもかれは、両方とも全会員に配布しています。リナルディ神父は、十個のダイヤモンドの光について、自分の考えをのべ、聖フランシスコ・サレジオの著書、とくに「愛神論」、「説教集」、「霊的訓話」（10）をよめば、このダイヤモンドの意味に相当する純粋で実用的な説明が得られると言っています。しかもあの当時、聖フランシスコ・サレジオのこれらの著書は、サレジオ会的養成のために、日々用いられました。

また、リナルディ神父は、この夢の教えを本会霊性のもっとも貴重な源泉と結び付けています。源泉とは、すなわち、本会の会憲と伝統であります。

それは、ちょうど会憲が認可された五十周年記念が行なわれていたその時でした。かれは、会憲と、できたばかりの会則改訂版に、この夢の精神を結び付けました。そして、会憲と会則こそ、「本会の魂」（10）であると言いました。

それだけではありません。リナルディ神父は、この夢の教訓を本会のもっとも純粋な伝統とも結び付けて、「それは、この伝統によって本会の特長と使命が独特の色彩を帯びようになるからです。わたしたちが、この色彩と特長を失うとしたら、文字どおりに会憲・会則を守るだけの修道者や教育者ではありえても、もはやドン・ボスコのサレジオ会員ではなくなってしまう」（11）と言っています。これは、リナルディ神父の考えなのです（12）。

リナルディ神父は、その任期の終わりごろ、とくにこの夢を講話や説教の中で幾度となくテーマにしていました。そこでかれは、サレジオ会のアイデンティティーを説明するために、この夢を会憲と生きた伝統に結ばれたものとして紹介しています。

ドン・ボスコの五代目の後継者ジジョッティ神父も、1964年度の「年間努力目標」（ストレンナ）を発表するに

あたって、会員の注意をこの夢に向けさせています。つまり、かれもまた、この夢の原文を全会員に配布しました。それは、反省と改心、およびアイデンティティーのデリケートなプロセスを進めるための、いわば体温計として、この夢を提供するためでした。

かれは、こう書いています。

「十個のダイヤモンドの夢は、わたしたちにとって、もっとも本質的なすべての善徳を実行するように励ましています」と。

以上述べてきたことから考えると、この夢は、「サレジオ会の伝統において、もっとも広く知られ、また黙想されている」(13)と言えるでしょう。

そこでわたしも、この夢が提供するさまざまな意味を再反省したいと思っています。

たぶんある人は、ここで、ある種の研究が要求するところを考えると、このような夢は、その心理学的・神学的・教育的分析を行う以前に、その歴史的な性格を確かめねばならないというでしょう。最近、原文の批判テキストが発行されるようになっていきます。わたしは、このテキストの中にみられる研究の科学的価値、またドン・ボスコのすべての夢の独特の本質についてなされる研究の学問的価値を疑うのではありません。むしろわたしとしては、もっと高い、より重要な見地から話したいのです。つまり、本会の霊性の生きた独特のレベルにおいて話を進めたいのです。

事実、“いのち”そのものは、それについての、いかなる研究よりも先に存在します。しかもこの“いのち”を養う要素は、学問的によく調和の取れた計画を作ることだけにとどまるものではありません。そのうえ、この種の研究では、間に合わないと言わざるを得ないのです。むしろ、この“いのち”そのものの活躍と発展をこそ、目指さねばならないのです。だからこそ、ドン・ボスコもその後継者たち、なかでもリナルディ神父と、サレジオ会員養成の協力者達も、研究に余りエネルギーを消耗するようなことなく、むしろ本会の霊性の生きた伝統的方法をもってこれを生かすようにしました。

リナルディ神父の次の言葉は、これについて、わたしたちに反省をうながします。すなわち、わたしたちを励まして、かれはこのように言っています、「夢の中に提示されているサレジオ会員像を毎日の黙想をもって研究し、より明白にしていかなければなりません。また、どんなチャンスも、のがさず利用して、このことを話し、夢に現われた幻をいろいろの角度から適切に説明しなければなりません」。

どうか、管区長がたも院長がたも、こぞってこのサレジオ会員像を講話のテーマとするように。

また、黙想会の際の講話担当者もこの夢の中から講話のテーマを選んで、聞いている会員の心にサレジオ会の霊性がしっかりと刻み込まれるように努力するように(14)。

この夢のもっともするどい解説者リナルディ神父

この夢を誰よりもよく反省して、本会全体の指導というこのテーマに熱心に取り組んだのは、リナルディ神父であると言えます。

この夢を見て、ドン・ボスコが真っ先にこれを話したのは、サン・ベニオ・カナヴェーゼの支部でした。そのとき、この支部にいたリナルディ神父は、特別な印象を受けたのでした。

かれは、ドン・ボスコの第三代目の後継者として総長になると、前に述べたように、この夢を説明する回書を数回にわたって会員に配布しました。直接かれからその説明を聞いた会員も、まだかなり生き残っています。

特に1931年の初夏、フォリッツォの修道院で若い会員を前にしたかれの説教は有名で、その記録も残っています。

リナルディ神父の文書を読むと、かれが、まずこの夢について、注意深く反省し、それから徐々(じょじょ)にその理解を深めていったことが分かります。

またリナルディ神父は、その晩年に、この夢に対する特別な組織的解釈を提供しています。この解釈は、かれの長

い黙想と、耐えざる観察の実りであって、深く、重要なポイントを指摘しています。

かれは、あの夢の人物像が誰であるかを説明すると共に、ダイヤモンドの配置に対する深遠な理由もさぐっています。

かれの考えによれば、胸や背に配置されたダイヤモンドは、おのおの異なる光度をもち、全体としてサレジオ会員の霊的特長を示しています。すなわち“組織的”で、“ダイナミック”な像を提供しています。

リナルディ神父は、「もし、これらのダイヤモンドの配置を変えるなら、もはや本会の生活のその輝きを表わしえなくなる」(15)と、言っています。

また、かれは、この夢の中には、“まことのサレジオ会員像”あるいは“完全なサレジオ会員像”といったほうがいかにも知れませんが、実によく紹介されているとも(16)言っています。

サレジオ会員像は、ドン・ボスコが夢に見たままのサレジオ会員像に他なりません。かれが、この夢を書き残したのは、単なる記念のためだったのでしょうか？とんでもありません。これを本会の生活の中に実現させるためだったのです(17)。

したがって、リナルディ神父の説明によれば、“マントをまとった人物と、マントにはめこまれたダイヤモンドの配置”この二つは総合されて、本会独特の特長である霊的プロフィールを示すという深い意味を持っています。これは、非常に注意すべき考察ではないでしょうか！

リナルディ神父こそ、本会の霊性にもっとも忠実なあかし人の一人でありましたが、かれは、その考察を総長としての生涯の終わりに示しています。このことから考えても、れが、長い黙想と、絶えざる祈りの成果として、この総合の実りを得たことが分かります。天からの特別な、なんらかの照らしがあったことも考えられます。

ところでわたしは、リナルディ神父が開いたこの道をたどって進みたいと思っています。それで、ここにそのいくつかの面を明白にさせましょう。これは他でもありません。教会における本会の使命に、より忠実なものとなるためです。また、本会のアイデンティティーをより正しく深めていくためです。

本会の霊的プロフィール

夢の第一の場面は、サレジオ会員像を提供しています。しかし、個々のダイヤモンドにおいてではなく、夢の中に出現した幻全体においてそうだと思われれます。

夢に現われた“人物”

まず、第一に言えることは、夢の中の主人公が、「尊い人物」だということです。これは、本会霊性の理想的イメージを表わしています。リナルディ神父も言っているように、「現在、と未来の会員はみなこの人物をその鏡としなければなりません」(18)。

こんにち、この夢の百年祭を祝うに当たって、わたしは、聖ドン・ボスコ自身、ずっと一生涯を通して、このシンボリックな人物の生きた実現であったと言い得るのです。

また、リナルディ神父の興味深い言い方を使って、「全てのダイヤモンドは、一つ一つおのおの独特の光度を持っているが、これをすべて合わせると、ドン・ボスコという唯一の光になる」(19)と、言っています。

ドン・ボスコがこの夢の中の“人物”を、このような意味に解釈したのでないことは言うまでもありません。そのようなことは、かれにとって想像さえできなかったことです。

それにしても、後にリナルディ神父は、この夢を考察して、このことを、それがドン・ボスコ自身を表すと理解して、正しい意味を具体的に示しました。

かれは、刷新された会憲にも、「サレジオ会員は、神と教会から与えられた父ドン・ボスコをくわしく研究して模倣する」と書いているほどです。つまりドン・ボスコを「わたしたちの具体的な模範」(20)として紹介しているの

です。

前と後の二つの姿

夢による出現は、その主人公をたがいに、非常に異なる二つの姿をもって紹介しています。しかし、この二つは、補い合うもので、はじめは前から、次は後から見た姿が示されています。

前と後の二つの姿という表現は、一見あまりにも単純すぎる感じがしますが、よく考えていくと、はじめ一瞥（いちべつ）したときよりも、そこに非常に深く鋭い考察があるということが、分かってきます。

他方では、リナルディ神父のオリジナルな考察に驚かされます。他の誰もこれほどの深い意味を見抜くことはできなかったのです。リナルディ神父は、以上の考察を講話の中で幾度となく紹介し、1931年のある回書に簡単ではあるが、明白にこれについて述べています。

要約してダイヤモンドのことを言ってみると、マントの前にあるダイヤモンドは、サレジオ会生活の活躍を示し、後のものは、サレジオ会生活の内的靈性を示しています(21)。

それは、いわばサレジオ会員を一つの大きな“メダル”に例えて見るようなものです。つまり、サレジオ会員は、“メダル”の両面にあたります。その表の面は、サレジオ会員の外的な姿、その顔 *Da mihi animas*（ダ・ミヒ・アニマス）で、つまり「靈魂をお与えください」という面です。

裏の面は、活躍の秘訣ともいべき内的生活で、一般には外部にそれほど現れていない修徳の面 *Coetera tolle*（チェテラ・トッレ）「他のものを取り去ってください」という面です。

顔

マントの前についた五個のダイヤモンドの光、つまり信仰、希望、愛徳、労働、節制は、サレジオ会員が、若者への目に見える奉仕である公的あかしを表わします。

結局、前から見ると、サレジオ会員には、修道生活の特長が現われていません。どちらかといえば、むしろ信仰者の特長を見せています。それは、キリストの奥義に対する熱烈な信仰者の姿、愛徳に鍛えられた心の愛情あふれる姿、生き生きとしてバランスがとれ、活動的であるが、節制をよく守る、常識と創造力に富む者としての姿を表わしています。

また、“労働”と“節制”のダイヤモンドは、肩にあって、マント全体を支えています。

リナルディ神父は、こう書いています、「前からサレジオ的生活を見て、その活躍を考えると、それは、“労働”と“節制”につけるように見えます。しかし、この二つは、信仰と希望のますます輝きをましていく光に包まれており、深い心の泉から湧き出す愛によって生かされています(22)と。

わたしは、ここで、五つのダイヤモンドに対して、サレジオ会的なくわしい考察をするつもりはありません。それよりもむしろ、会員の一人ひとりが、自分の個人的な理想に応用できるように、いくつかの一般的考察に留めたいと思います。

おもかげ

第一の考察、夢に登場するこのダイヤモンドは、あまりにも単純な解釈で善徳の一般的な目標のようなものと考えてはならないのです。これは、のちにくわしく考察することにしましょう。

善徳といっても、どんな善徳なのかその名称がすべて古典的な善徳のリストに載っているか、どうかは、問題ではありません。むしろ、それは、存在の態度として扱ったほうがいいでしょう。さらに詳しく説明するなら（ここ

で、わたしは、マントの前の部分について話していますが)、外部にはっきり見える“おもかげ”のようなものとして考えればいいでしょう。事実、これらのダイヤモンドは、サレジオ的 容貌 (ようぼう) を表しています。

すでに、修道生活の古典的な形式を認めなくなったと思われた当時の社会にあって、ドン・ボスコが考えたままの、キリストの弟子像とその特長を示しているのです。

わたしは、最近書いた、修道士である会員に関する回書の中に、こう述べました、「本会は、ふつうの修道会にみられない特長、すなわち、“世界に向かって開かれたもの” (23) という特長をそなえて創立された」と。

ところで、リナルディ神父の文献を調べてみますと、かれは、 “現代性の新しい原則 “について、たびたび述べています。かれの言葉によれば、「ドン・ボスコは、このような原則をその事業全体の土台とするようにインスピレーションを受けたのでした。だから、いうまでもなく、この原則は、わたしたちのもっとも貴重な遺産なのです (24) 」。

ここに、とっておきのこの原則を説明するこの原則を説明する方法があります。それは、教皇ピオ九世が、1877年1月21日にドン・ボスコに言った言葉を引用することです。

あのとき教皇は、病気で休んでおられましたが、ドン・ボスコを親しく寝室によんで、こう言われました。

「今あなたに一つの奥義を知らせてあげましょう。そうです、わたしは確信しています。神はそのみ摂理をもって、ご自分の偉大さを世に示すためにこそ、あなたの修道会を起されたのです。

神には、確かに、これまで数世紀にわたる過去のたくさんの修道会に隠して、取っておかれた重大な奥義があったのです。それは、今あなたの修道会にまかされようとしています。

わたしは、あなたの修道会が教会のなかで、新しいものであることを知っています。それは、この修道会がこれまでに類を見なかった新しい種類のものだからです。

修道的レベルでありながら、同時に世俗的レベルでもあるようにと、この新しい時代に創立された修道会です。それでこの修道会は清貧の願いを立てても財産を持つことが出来ます。いわば、修道院的特長とともに、世俗的特長を併せ持ち、会員は、修道者でありながら、世俗の人でもあります。

修道生活を送りながら、同時に社会において一般市民となるような修道会がその特長です。《…………》あなたの修道会は、“神のものは神に、チェザルのものはチェザルにかえすことができる” という一つの“あかし”のためです。また、その具体的な方法を示すためなのです。そうです、サレジオ会は、このためにこそ設立されました」 (25) と。

教皇のこの言葉によると、初めは五つのダイヤモンドで象徴されるサレジオ会像は、まず何よりも先に、わたしたち修道者としての立場にスポットライトを当てるものではありません。もちろんそうだからと言って、わたしたちが、実際に完全な修道者であることに変わりはありません。

夢の登場人物に見る第一の、そして特に目立った姿は、キリストの奥義に富まされ、強くされ、生かされ、勤勉で忠実な社会人を表わしています。しかも、この人物が百パーセントの修道者であることに、だれも反感を抱くはずがありません。

このように、サレジオ会員は、立派な修道者のままで、世俗の社会にその場を占めることが出来るはずです。そのうえ、エネルギーで、責任感の強い市民として。つまり、かれは、キリスト教的精神をもって世間を生かそうとする人です。サレジオ大家族の角度から見ると、この考えは、ますます広がりを持ってきます。この大家族には、修道者でない大勢のメンバーが加わってきます。「かれらの選んだ道は、各人の具体的な実情と若者のまことの必要に応じた、多種多様な形式のもとで、サレジオ会的精神を持って生活する道です」 (26) 。

おもかげを支えているもの

では、もう一つの考察を述べましょう。夢の人物が着ていたあのマントを考えてください。それは、肩から垂れ、「労働と節制」の大きな二つのダイヤモンドによってとめられ、支えられているように見えました (27) 。

ここに、ドン・ボスコが、たびたび宣言していたサレジオ会の有名なモットーがあります。すなわち、「労働と節制」です。

1876年、ドン・ボスコが見た荒れ狂う雄牛の夢について書かれてあることを読むと、本会の未来を保証する条件について、こう述べられています。

「この言葉を印刷して広めてください。この言葉は、あなたたちの紋章であり、モットーであり、あなたたちの特徴でなければならないのです。すなわち、“労働と節制は、サレジオ会を繁栄させるだろう”という言葉です。あなたは、この言葉を説明させ、また、たえず熱心に繰り返さなければなりません。この言葉を説明するための手引きとなるようなものを印刷してください。なぜなら、“労働と節制は”こそ、あなたが本会に残す遺産であると同時に、その光栄になるからです（28）と。

右の背の部分におかれた“労働”のダイヤモンドは、何を意味するのでしょうか。つまり、それは、聖フランシスコ・サレジオが、そのテオティモ（神愛論）（29）の中で述べているあの、“労働のエクスタシー”が、わたしたちの第一のものとならなければならないことを示すのです。

活動へのこの熱烈さはすべて、信仰・希望、特に愛徳の根深い原動力に生かされているからこそのものであります。従って、サレジオ会員は、いわゆる《仕事のための仕事をする》“猛烈な働き手”となつてはいけません。かえって、“救いのための働き手”とならなければならないのです。だからこそ、たとえ教育事業や人間発展のために働くにしても、めざす第一の目標が、人の救いである“働き手”でなければならないのです。

ところで、次は、左の背の部分にある“節制”のダイヤモンドのようですが、これを背の部分にある“断食”のダイヤモンドと混同しないようにしましょう。この二つは、一見、似ているように見えますが、そうではありません。両者の違いを示すためにこそ、一つは前に、一つは後に置かれています。

あとでも述べますが、“断食”が肉体の苦業を伴う修徳を示すのに対して、“節制”は、一般にセルフ・コントロールを意味します。

このコントロールは、スパルタ的なきびしい様式のもので、厳格に時間割を守ることが要求されます。また、直情的反応を抑えることが出来、ほどよさを計ることができる“軽量の目安”を持ち、バランスのセンスを身につけることが求められます。節制のこの態度は、愛想のよい民主的な特徴をそなえ、常識があり、健全な意味の世渡りのうまさをもっています。

リナルディ神父は、サレジオ会員の身につけるべきコントロールについて、こう言っています。

「サレジオ会員は、目を閉じて進むのではない。しっかりと目を開けて進む。しかし、必要以上に進むことはしない。今していることが不必要になったと悟ったら、さっと止めることが出来る。

遊び時間にも冷静を保ち、自分を怒らせるようにしむける生徒に対しても、怒りちらさない。また、必要に応じて黙り、そしらぬ顔をし、話し、賢明にふるまう。これこそ体得しなければならないサレジオ会員の長所である」と。

キリストの魅力的な姿

第三の考察。胸にある三つの、すばらしいダイヤモンドは、サレジオ会員の全パーソナリティーが湧き出る泉を表わしています。それは、キリストに従うことによって、神の奥義に対して常に開かれた人格を示します。ドン・ボスコの使命と、サレジオ会の霊性全体の根本的な秘訣は、ここにあります。

予防教育に関する回書（90）の中でわたしは、サレジオ的精神が、熱狂的で完全なイエス・キリストへの一致から湧きでて、マリアのご保護のもとで現代世界にキリストの奥義を実現させようとすることを、強調しました。

このキリストの奥義とは、公会議が断言したように、「子ども達を祝福し、全ての人に善を行なうキリスト」（31）のみ心です。

ここでは、信仰・希望・愛徳の三つのダイヤモンドに示されたサレジオ会的内容をくわしく説明することはできませんが、せめて、次のことだけでも強調したいと思います。

信仰のダイヤモンド。これは、わたしたちの生活に表われねばならない超自然的なビジョンを示しています。すなわち、その生活は、悩ましいことで、いっばいであっても、楽観主義に貫かれていなければならないのです。なぜなら、聖書に記されているように「世に勝つ勝利は、すなわち、わたしたちの信仰」(32)だからです。

わたしたちの司牧的な活動を照らす光も、また、サレジオ的使徒職の特長であるあの健全なヒューマニズムを支えるのも、わたしたちの信仰です(33)。

希望のダイヤモンド。これは、天からの助けが確実に与えられることを示します。ドン・ボスコは、“助け手”という光のもとで、聖母マリアも眺めています。

天からのこの助けは、特に青少年の救いのために、毎日の実用的な活動を立派に計画し、実現するうえで大切です(34)。

愛徳のダイヤモンド。これには、特別な注意をはらう必要があります。そのためにこそ、心臓にあたる胸の上、すなわち、“心”におかれたのだと思います。

夢の第一の場面では、コスタマニヤ神父が、ファニャノ神父に、こう書き取らせています。「愛は、すべてを理解し、すべてを耐えしのび、すべてにうち勝つ。言葉と行いをもって、これを説教しよう」と。

ドン・ボスコにとって、愛徳とは、他者に対する純粋な、変わらぬ愛の態度でした。他者とは、あるときは神ご自身であり、あるときは、神のかたどりであります。

愛徳とは、みずからをキリストの中に沈め、キリストとまったく一致することです。この一致は、キリストの中であって、父である神の子としての“いのち”に生きるため、たえざる祈りの精神があります。また、同時に、他人へのもっとも寛大な奉仕を、キリストとともにあかすするためです。つまり、若者への全体的な奉仕のためです。

ここにこそ、若者への特別な愛という独特のたまものを受けて、いつくしみに溢れるドン・ボスコの心のすべてがあるのです。

このたまものによる愛徳に生きる限り、サレジオ会員は、ドン・アルベラが書いているように、「若者に、ある程度の自然的な魅力を感じるだけでは満足できず、特別な愛を持つはず。この独特の愛こそ、この独特の愛こそ、その最初のレベルにおいて神のたまものであって、サレジオ会の使命にほかなりません。しかし、この愛徳を成長させ、発展させるのは、わたしたちであり、知恵と心の義務です。すなわち、そこにこそ、“サレジオ会的精神の真髄”があり、独特の“いつくしみ”が、つきることなく湧き出る泉、すなわち、あの“牧者の愛”があるのです(36)。

この“いつくしみ”は、教育活動を、自発的な喜びと楽しみで包むとともに、その特長となるものなのです。

こうすれば、マントの前に置かれたあの五つのダイヤモンドは、“サレジオ会員像”を映す本質的な写真みたいになってきます。

それは、バランスのとれた熱心に働く市民であり、自分独特の、しかも有益なキリスト教的使命を、社会にもたらそうと励む市民であり、自分が、それによって生きている信仰のおかげで、賢明で楽観的である人間です。

また、希望の原動力によって活動にあふれる創造的な人、

愛徳の泉からほとぼしり出る“いつくしみ”によって、たえず祈りつづける人間味豊かな善人です。

信仰・希望・愛徳という三個のダイヤモンドからなる、あの輝く三角形の中に、わたしたちは、この霊的アイデンティティーを証明し、総合する言葉として、次の言葉を読むことができます。

「イエズス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも若者の偉大な友である」と。

骨 組 み

夢のあの人物の背後に輝いていた、従順・清貧の誓願・報い・貞潔の誓願・断食という五つのダイヤモンドの光は、サレジオ会員像の隠れてはいるが、しっかりした骨組みを紹介しています。ここにこそ、「他のものは取り去っ

てください」という本会のモットーの、あとの部分の意味が発見され、また、本会奉獻生活の独特のスタイルが基礎づけられるのです。

五つのダイヤモンドは、善徳の一つのリストみたいなものでしょうか。いいえ、むしろ、それは、キリストに従う者の、修徳上のある種の特長となる、支柱を意味します。

ドン・リナルディの解釈によると、—これを強調することは、非常に重要なことでありますが—マントの背後にあるこの支柱は、外部に現れる姿ではなく、直接目にうつらない隠れた骨組みのようなものです。しかし、隠れていても、絶対に必要なものです。

ドン・ボスコは、教皇ピオ九世の勧めもあったが、自分でも、サレジオ会を公式に紹介する時には、修道者のイメージを与えないように心を配っていました。これを証明できるかれの言葉も事件もたくさんあります。事実、ドン・ボスコは、サレジオ会員が、外部から見て、伝統的な修道者のタイプを思わせるような修道服や生活様式、その他、修道者くさいイメージを与えないことを望んでいました。これは、世俗精神に導かれる現代社会の中にあつて、ことさら目立たせないため、反感を起させないためでした。とはいっても、かれは、サレジオ会員が、どこにいても百パーセント司祭であり、信徒であるようにと要求していたのはもちろんのことです。いいえ、それだけではありません。かれのこの要求はもっと強く、こう主張しました。“ひたすらキリストに従うことをもって、その生活とする修道生活の、確信と決意が、世間の目に隠れていればいるほど、その確信と決意は、より深いものでなければならない”と。つまり、かれの考えでは、この決意は、本会の決意を果たす為に、“背後の力”、言い換えれば、“内部からの力”だったのです。

そうです、ドン・ボスコは、外部に見えなくても、この力がキリストの戦いを善戦するための、いわば、防備の行届いた戦争基地から発砲されるものにも匹敵する躍進の力であってくれるようにと、どんなに望んでいたことでしょうか。その基地は、四つの砦を持つ四辺形の要塞です。ヨハネ・カリエロは、このことをよく悟っていました。かれは、「修道者であろうと、なかろうと、わたしは、ドン・ボスコのもとに残ります」と言っていました。

あの夢の人物の、前から見る姿は、サレジオ会員の肉眼に写る姿です。その顔は、社会と若者に向けられています。会員の霊的な健全さと忍耐強さ、盛んな活動能力の秘訣は、その奉獻者としての確信と、この確信に基づく修徳上のしっかりした訓練にあるのです。

ここでも、わたしは、これら五つのダイヤモンドの細かな分析を止めて、その一般的な考察にとどめることにします。

中心的な位置を占める従順

あの夢の人物の背後で、一番注意を引くことは、従順のダイヤモンドが、中心に位置しているということです。なるほど、ドン・リナルディが書き残しているように、「サレジオ会員の内的霊性は、従順によって導かれているのです」（37）。

ドン・ボスコは、その会憲の中で、サレジオ会員の誓願として常に従順を第一の場所に置きました。また、若い会員の修道的養成について話すときにも、かれは、従順が習得すべき最初の価値であると強調したのです。

それで、幾度となくドン・ボスコは、「修道会では、従順がすべてです」（38）とか、「従順は、すべての善徳の土台であり、支えであります」（39）とか、「従順は修道会の魂です」（40）と繰り返していました。かれは、会憲の序文の中でも、聖ヒエロニムスや聖ボナヴェントウラ・大聖グレゴリオ等の言葉を引用して、同様のことを強調しています。

従順の占める位置が第一であることは、これを自分勝手なわがままと取りかえるとき、修道会に対するアイデンティティーも、従順も失ってしまうということを考えれば、消極的で、反対側の面からではありますが説明できません。

また、ドン・ボスコは、会憲の序文にこう書いています。

「しかし、これと同時に注意しておかなければならないことがあります。それは、もし、あなたたちが、従順によってではなく、自分の自由意志によって行なおうと思うようになったなら、その時からあなたたちが、自分たちの身分について不満を感じるようになるということです」(41)と。

従順が中心的なものであるということについては、リボンの夢の中に(42)マリア的なインスピレーションを見つけることも出来ます。その夢の中で、マリアご自身、ドン・ボスコに、こう勧めておられます。「従順のリボンでかれらを結びなさい」と。

サレジオ会員にとって、従順が、第一の場所を占めるおもな理由の一つが、ここにあります。それは、わたしたちの実生活(43)と共同生活(44)の中で占めている本会の使命の重大さで、従順にこれがかかっているからです。さて、サレジオ会員にとって、「従い易い心は、修道誓願の土台となっています」(45)。ドン・ボスコは、純粋で健全な“従順の善徳”を青少年教育のためにも、第一位を占める要素として要求しました(46)。

かれは、夢のことを書いた時にも、こう述べています。「四辺形の要塞の中心ででもあるかのように、真中に、一番大きな稲妻のように、煌くダイヤモンドがあり、そこには“従順”と書かれてありました。そして、人物の背後についていた四つのダイヤモンドはみな、この真中のダイヤモンドに向かって、その光線を放っていました」と。

従順のダイヤモンドが中心の位置を占め、しかも、それが胸の中心にある愛徳のダイヤモンドの“まうしろ”であることを考えると、ますます意味深長になってきます。実際に、サレジオかいた従順は、わたしたちの共同生活が“一つの心、一つの魂”によって営まれるように協力しています。

このように従順は、わたしたちの交わりの土台であり、その生命力とも言うべき兄弟愛の絆の成果であります(47)。

清貧の具体性

もう一つの考察は、清貧のダイヤモンドについてであります。このダイヤモンドの光線の中には、「清貧は、言葉だけでなく、愛と実行を持って生活に生かさなければならない」という言葉が読めます。

後に、夢の第二部になると、情景が、がらりと変わって、マントは虫に食われて大きな穴があり、そこには、「惰眠とおしゃれ、暴飲と金銭欲」という言葉が読めます。

このダイヤモンドで示されている清貧の誓願も、その占めている位置によって考えねばなりません。

まず気づくのは、それが直接目に映る場所におかれていないということです。清貧は、個人的にも、修道院の共同体としても、奉獻された人の義務、すなわち、離脱心と犠牲心の務めなのです。では、これについて、ドン・ボスコが話していた言葉をお聞きください。

「修道者の誇りは、清貧であります」(48)。

「しかし、常に清潔でなければなりません」(49)。

「あまる物を乱用してはなりません、わたしたちの持ち物は、わたしたちの物ではありません。貧しい人のものです。まかせられた物を立派に使わない人は、災いです」(50)。

「清貧だけでなく、清貧の仲間《=清貧からくるいろいろの不自由》までも愛さなければなりません」(51)と。

それで、わたしたちは、楽な生活ではなく、スパルタ的な厳しさを守らなければならないことになります。ドン・ボスコは、「清貧を守るためには、これをまず、心にとめておかなければなりません」と言っています。

このドン・ボスコの言葉でも分かるように、清貧のダイヤモンドは、わたしたちの心の一つのあり方を一個人としても、共同体としても一思い出させます。

この心がまえがあるかぎり、「主のお招きに応じた使徒たちのように、わたしたちも、現世の財に関する直接の心づかいから解放され、おん父の摂理に信頼して、まったく自分を捧げながら福音に奉仕するのです」(52)。

マントの前にある五つのダイヤモンドに、本会の清貧の、使徒的で、より直接的なものと思われる面が反映されています。ドン・ボスコも、こう言っています。

「清貧の精神は、これを心の中に留め、単に物質的な財産に執着しない、というだけでは、足りません、これを外部に、つまり世間にも示さねばならないのです」（53）と。

しかもその清貧は、わたしたちが、だれに奉仕するか、というだけで示されるのではないのです。わたしたちは、これを、自分たちの生活と使徒的活動という公けの、わたしたちのやり方で示さねばなりません。

“労働と節制”のダイヤモンドを、わたしたちの清貧の、社会的な表現と考えるべきです（54）。そのわけは、わたしたちの清貧が単に貧しい人と同じ生活をするということ以上に、キリストが山上の説教でお教えになった“まずしさ”を、これにふさわしい生活によってあかししたいからです。結局、唯物論的でない社会生活の土台となるものを世に示したいためです。

プエブラ市の司教会議で言われたように、「福者からインスピレーションをとったこの清貧は、現代世界における唯物主義への挑戦であって、消費社会に変わるべき社会への扉を開く解決の鍵」（55）なのです。

事実、わたしたちの生活様式は、資本主義のそれとも、また、社会政治的なそれとも正反対のものでなければなりません。従って、わたしたちの生活様式は、相手のイデオロギーの“まね”でも、階級闘争でもありません。かえって、わたしたちの生活様式は、明らかに福音書からインスピレーションをとったもので、これをキリストの奥義によって、絶えず養いながら、近代化させていくものです。わたしたちは、常識あるバランスのとれた方法でこの清貧の生活を実行し、だれとでも話し合う決心をしています。これこそドン・ボスコが、新しい社会作りの陣痛に悩んでいた当時の雰囲気の中であって、とった態度であり、特徴だったのです。

貞潔の要求

もう一つの考察は、貞潔の誓願のダイヤモンドについてです。

このダイヤモンドについては、こう書かれています。

「このダイヤモンドの輝きは、独特の光を放ち、みつめるとまるで磁石が鉄を吸い寄せるように、わたしたちの視線を集中させていました」と。

ドン・ボスコは、サレジオ会員の貞潔の“輝かしさ”について、たびたび話しました。かれは、「貞潔を愛する」というベネディクト会の規則よりも、更にもう一つのことを考えていました。かれの考えでは、貞潔を愛し守るだけでなく、これを輝かせなければならないのでした。そのため、ドン・ボスコは、貞潔のすべての価値について、非常に強い要求をしていました。

サレジオ会員は、若者のためにあるのです。だからこそ、友情を結ぶにあたっては、司牧的な愛に満ちた魅力的な心を、区別なしに、すべての人に示さなければなりません。

ドン・ボスコにとって、“愛するだけではたりないのです。愛されるようにもしなければなりません”（56）。このために、サレジオ会員の修徳養成には、疑いさえも与えない貞潔のあかしをさせることをめざします。貞潔を守る上で予防上の注意が多々要求されているのは、この理由によります。結局、サレジオ会的愛情は、貞潔なしには実現不可能ということです。

ドン・ボスコは、会憲の序文に、貞潔は、わたしたちにとって、「もっとも必要なものである」と書いていますが、このことは、わたしたちが教育の使命を果す上でも、欠くことのできないものです。あれほど貞潔とは逆の方向にさそわれている今日であってみれば、かれらには、愛について、特別なメッセージをもたらす必要があります。

他方から考えますと、ドン・ボスコが、会憲の序文に述べているように、「この、全ての評価を超える真珠は、霊魂の敵からよく攻撃されています。それは、もし、これさえ奪い取ることができたら、わたしたちの聖徳が全て破壊されてしまうと悪魔が知っているからです」（57）

それで、貞潔を守るために、いろいろの注意と努力が賢明になされなければなりません。

さて、貞潔を守るための、これらの注意は全て、“断食”のダイヤモンドに集中させることができます。あの夢では、この“断食”のダイヤモンドは、“節制”のダイヤモンドとはっきり区別されています。前者がマントの背後に

置かれた理由は、それが修徳上の養成になくなくてはならない、欠くことのできない要素であることを示すためです。

ドン・リナルディの解釈によれば、“断食”のダイヤモンドは、サレジオ会員像の特色となる、ある姿の一面を表わしています。

すなわち、ドン・リナルディの解釈では、“断食”のダイヤモンドは、肉体の苦業という広い分野を示すのです。そして、この苦業と犠牲なしには、貞潔の守られたためしがありません。

ドン・ボスコも、しばしば“美德”について話していますが、かれは、この“美德”を日々のさまざまな犠牲と、その精神をもって守らねばならないと言ったのです。また、かれは、これほど貞潔の美に関して、はっきりと話しながらも、それが失われぬかと心配するよりも、むしろ、それを守るために、どうすればよいかに、より心を配っていました。ここにも、わたしたちの父の心理がよく見えています。これこそ、教育的な実践に対するかれの深い理解の表れではないでしょうか。

天国に対するセンス

最後に、“報い”のダイヤモンドについて、もう一つの考察をしなければなりません。

まず、このダイヤモンドを希望のダイヤモンドと混同しないように注意しましょう。

事実、希望のダイヤモンドは、マントの前の部分の胸の所に置かれているのです。これは、明らかに、神のみ国の建設におけるサレジオ会員のダイナミズムと活躍を目立たせるためです。なぜなら、会員の忍耐強さと、使命に対する熱烈さは、神の助けが確実に得られるという希望に基づいているからです。しかも、このお助けは、復活された二人のお方、キリストとマリアの、仲介と取り次ぎで、ますます明らかになってきます。

これと異なり、背後にある“報い”のダイヤモンドは、心に絶えず天国を思いめぐらし、これによって、修徳上の努力をするのに必要な力を、獲得していく態度を示しています。

この態度をドン・ボスコは、**un pezzo di paradiso aggiusta tutto**（天国のかたすみでもいいから、入れさえしたら、なんでもよくなる）という言葉で表わしました。

ドン・ボスコが会憲に書いたように、「会員は、暑さ・寒さ・喉の渇き・空腹・疲れ・辱しめが、神の栄光と、人々との救いに役だつ時は、いつでもこれらを耐え忍ぶ心構えが来ています」（57b）。

ご覧の通り、善意を持って働き、生活する人は、たびたび天国のことを考えるので、苦業の精神を養うことが出来るのです。

さらに、ドン・ボスコは、会憲の序文の中で、このように続けています。

「どんな任務をあてがわれようと、また、どんな労務、苦痛、不快に出会うとも、神にのみ報いを期待しなければならないことを、忘れてはなりません。神は、そのみ名のためにされたことなら、例え、どんな些細なことでも、お見逃しにならず、いつか豊かにお報いくださることは信仰の教えです。

この世で命が終わって神である主の裁きの前に立つその時、主は、やさしいお顔で私たちを眺めて、“よしよし、善良な忠義な僕だ、あなたは僅かな物に忠実だったから、私は多くのものをあなたにまかせよう。あなたの主人の喜びに加われ！（58）”と仰せられるでしょう」と。

また、「苦労と苦難の日々は、天国に大きな報いが準備されていることを、決して忘れてはなりません」（59）と。

そしてドン・ボスコは、こう付け加えます、「サレジオ会員が、仕事が多すぎて倒れたら、それは本会全体にとって、一つの勝利であります」と。この言葉をもって、かれは、一会員の受ける報いに、他の兄弟たちも与るということを示そうとしているのではないのでしょうか。

確信をもって、たびたび天国のことを考えることは、ドン・ボスコ独特の霊性と、その教育法の重要な指導理念、および活動能力の源となります。それは、霊魂が、必然的に、しかも根本的に最終目的に傾こうとするその本能を照らし深めるからです。

ドン・ボスコは、このことを、7回も、ブオナ・ノッテの話で詳しく説明しました。そのテーマは、「神が、わたしたちに、天国を与えたいと望んでおられることを、なぜわたしたちは、しっかりと認めねばならないか」(60)ということです。

サレジオ会の特長

夢の人物の前と後の両面を、互いに補い合う一致の光のもとに、本会の特長を見つめ、ドン・リナルディの表現を使って「サレジオ会的生活の霊性」(61)にマッチした“オリジナリティー”とは何か?と問うなら、夢に助けられて、これに答えるのは、難しくないと思います。

サレジオ会独特の特長、それは、マントをまとっているあの人物の、輝かしい生き生きとした姿を飾る、十個のダイヤモンドの調和あるその全体であります。

人物の前と後の両面が互いに切り離せないばかりか、互いに補い合うという現実を示しているのは、もちろんです。この人物は、一人の会員でもあり、また、一つの忠実な共同体のこともあります。かれの全ては神の奥義に向かつて開かれていて、善が悪に対して最後の勝利を得ることを確信しています。

また、神の国の建設のためとあれば、疲れを知らない奮発心を示すのです。そのために、その愛は愛情にまで発展し、愛である司牧的な愛徳が心に満ち溢れ、揺り動かして、修徳に向かつてたゆまぬ努力を、具体的に続けるのです。

さて、このサレジオ会員像は、歴史の中に、手で触れられる生きた形をとって実現しました。ドン・ボスコその人です!

ドン・リナルディの言葉を引用すれば、「全てのダイヤモンドには、それぞれ異なった固有の光線が有りますが、これら全ての光線は、実は、ただ一つの光ドン・ボスコなのです」。

従って、サレジオ精神の特長は、単に一つだけの善徳につきるものではありません。かえって、それは、種々の心構え、深い確信、および経験で鍛えた方法を合わせたものであります。すなわち、これらが調和よく一つに集中されて、聖徳や使徒職のオリジナルなサレジオ会独特のスタイルを作るのです。

この特長をよく理解したいなら、抽象的な定義にたよるよりも、ドン・ボスコの見たあの夢を研究するほうが、もっと手っ取り早く分かり易いのです。それは、理論的な論文をこねまわすより、ドン・ボスコその人を眺めるほうがもっと役に立つということです。

また、サレジオ会のこの独特の特長を実行するためには、言い換えれば、わたしたちが、「あの夢の中の生きる人物の本当の実現」(62)となるには、何が必要でしょうか?いうまでもなく、会憲や純粋な伝統にインスピレーションをくみとった共同生活と、養成の、この雰囲気が必要なのです。

なぜなら、会憲と純粋な伝統は、サレジオ会誕生のあの当初、わたしたちの父である創立者ドン・ボスコが聖霊との交わりによって得、これを生かしたその体験を生き生きと伝えるのに、非常に役立つからです。

ドン・リナルディは、この夢のモデルを、個人の上だけではなく、共同体の上にも、その細かい所まで反映させるようにと、励ましています。それは、サレジオ会が、そのあるべき正しい姿を持って全世界に輝くためです。

夢の“まぼろし”に表われた威厳に満ちたあの人物のうちに、ドン・ボスコは、荘厳なマントと光に包まれたサレジオ会の姿を見ました。この人物の放つさまざまな光線は、わたしたちのことです。

ドン・ボスコは、また、会憲の序文の中で、こう言って、励ましています。

「《……》ところで、わたしたち会員のひとりひとりが、この貴重なダイヤモンドを求めて、これを少しずつ磨かねばならないのはもちろんですが、全てのダイヤモンドを、みな輝かせたいなら、わたしたち全てのメンバーが、わたしたちのモデルであるあの貴重なマントのように、ただただ一つ一つのものにならなければなりません。このためにこそ、会則や純粋な伝統に従って会憲を守らねばならないのです」(63)と。

アイデンティティーの亡び

夢の第二の場面を御覧なさい。とてもドラマチックです。そこに紹介されているのは、「誠のサレジオ会員の正反対」(64)、言い換えるなら、「偽サレジオ会員」です。

“サレジアンか？ 偽サレジアン”か？この恐ろしい危険をはらむ選択の前に立たされているわたしたちです。自分自身の真の姿を保つためには、どんなに努力しなければならないかが分かります。

この夢の第二の場面は、本会最初の数世代の人々にとって、あまりにも失望的に思われました。ところで、現代のわたしたちにとっては、どうでしょう。1960年代と、1970年代のあの恐ろしい危機のあと、最近あまりにも増えてきた退会者を思うとき、夢のこの第二の場面は、反省のための特別な試金石のように思われます。

ある何人かの会員がこの夢についての考察を会員のために提供するようにと、わたしに進めました。そして、かれらの中の一人は、こう言いました、「この夢の第二の場面に、“1900年サレジオ会に危機迫る”という言葉が読まれますが、1900年というこの時期には、何か注意しなければならない特別なことがあるのではないのでしょうか」と。

この会員が注意したように、あの“1900年”の数字は、文字どおりの意味から離れて、最初の二つの数字によって開かれる年代の意味に取れないでしょうか。とすると、第二の夢の場面は、1900年代のうちに実現されることになり、まだ20年あまりが残されています。

最近表われ始めている、恐ろしい危機は、あの破られたマントの厳しい忠告を思うとき、“なるほど”と、うなずけるような気がします。

まあ、この仮説は、面白い所がありますが、問題にしないことにしましょう。しかし、それにしても、ドン・ボスコが言いたかったことを、ゆっくり反省してみるのには、この現代にふさわしいことだと思います。きっと、よい成果を得るでしょう。

あの当時にも、ドン・ボスコは、いろいろの講話を持って、また、夢について書いたその記録を持って、本会の未来に対して、厳しい忠告を、幾度となくしています。

その一つの例に、悪魔が本会を亡ぼすための会議を開いたという夢の話があります(65) すなわち、ダイヤモンドの夢のこの悲しい第二の場面は、強い悲劇的な力でわたしたちに忠告するのです。

わたしは、この危機を、必ずしも一時代に結び付ける必要はないと思います。もちろん、この危機をはらんだ現代に、夢の忠告がより明白な現実性を帯びてくるのは当然です。しかし、その危機は、この時期に限らず、いつの時代にも同じようなことが起こりうるのです。

去年は、「兄弟たちを力づける」という回書(66)の中で、現代における修道生活の危機という不安なテーマについて考えました。それで、ここでは夢の中に含まれている厳しい、しかも真剣な忠告を強調するだけに留めましょう。

夢の第二の場面では、

「あの人物の顔は、憂(うれ)いに満ち、今にも涙をもよおしそうな様子をしていました。着ているマントの色はあせ、破れて、しわだらけで、ダイヤモンドの変わりに、虫にかじられた穴が開いているのです。《……》十個のダイヤモンドは、マントを蝕む、猛り狂う幼虫に変わっています」。

ゆがめられて、醜くなった顔

あの人物の前の部分にあった信仰・希望・愛徳のダイヤモンドの変わりに、超自然的な感覚がすっかり弱り果てた極度の霊的墮落を表わす言葉が読まれます。

超自然的な感覚が弱った場合、その代わりに一時的なイデオロギーを選び、これで墮落を隠そうとしたり、正当化しようとしたりする傾向が表われるのを、既にわたしたちは知っています。こうなったら最後、もう超自然的な

ものを、みんなうち捨ててしまうものです。

かれらは、労働と摂生の変わりに怠惰に流れ、司牧的熱意を失ってしまうのです。やがて、ブルジョワ的になり、軽率な消費ムードを身につけ、しかも、これを隠そうとして何かのイデオロギーを旗印にしようとするのです。

くずれる骨組み

マントの後を見ると、靈的な骨組みが徐々に崩れています。まず、従順が守られなくなります。そうすると、靈性の本当の具体的な土台が破壊され、交わりの絆が切れ、個人主義が増長し、回復の可能性さえ望み薄になってきます。

また、貞潔の変わりに、邪欲が忍び込み、感覚的な愛情に対する未熟な要求が強まるので、それまでは想像さえもしなかった重大な過ちまでも、簡単に犯してしまいます。

伝統的な清貧は、離脱・従属関係・共同生活と、物品の使用に関する具体的なさまざまな規則を要求しましたが、もはやそれらが、時代遅れのように考えられ、絶えず、贅沢な生活に憧れるようになって来ます。そして、この憧れは、利己主義に引きずられて、金銭の使い方に対して不当な独立を得ようとしします。

報いのダイヤモンドは、目もくれず、もはや天国に目を上げることすらなくなってしまいます。天国への望みが消えてしまったからには、そのためにどんな犠牲もする必要を感じません。

こうなれば、人間を欺いてしまう水平主義に流れ、全てをこの世的な測りで計ってしまいます。その理想は、全て現世的な生活の中に沈んでしまうのです。

このような会員のために、あの夢の人物のマントは、もと断食のダイヤモンドがあった箇所が大きく破れていて、そこには何も書いていません。

五官の節制を打ち捨てることは、各種のいざないと迷いに門を開いたことになります。こうなると、危機の迫った姿がますますはっきり現われてきます。では、この姿を現代的な表現を使って、ここに示してみましよう。

——前面の顔、その顔は、超自然的な感覚が薄れ、この変化を正当化しようとして思想を取りかえた結果、ブルジョワ的になった人の表情を示しています。

——背後の修徳の骨組みは、もはや崩れ落ち、その代わりに個人主義・邪欲・金銭欲・水平主義や苦業の排斥が見られます。

以上述べてきたことから分かるように、ドン・ボスコのあの夢には、生活を改めるための、どれほどの反省の材料が含まれていることでしょう！

未来に向かって、使命の確認と、養成への呼びかけ

夢の第三の場面では、サレジオ会員を力づけ、励ます白衣の青年を紹介しています。

かはれ、わたしたちが、自分一人で働くのではないことを、また、わたしたちが、主の「僕であり、道具」であることを思い出させようとしします。例えどんなに戦いが激しく困難に満ちていようと、わたしたちは、主の力によって耐えぬくことも、打ち勝つこともできるのです。それで、かの白衣の青年は、「勇ましく、雄々しくありなさい」と励ましています。

もちろん、わたしたちは、自分の弱さも、変わり安さも、よく弁えています。それで、わたしは既に「兄弟を励ます回書」(67)の中で、このことについて話しました。

そうです。強いのは、神だけです。したがって、神だけが、わたしたちを強めることがお出来になります。また、そうしてくださいませ。キリストというしっかりした土台の上に、わたしたちを立たせてくださったのです。

神は、完全に忠実なお方ですから、わたしたちを悪から守ってくださいませ。そして、神だけが全ての時代、全ての世紀に力を持っておられるのです。

したがって、夢のあの青年がわたしたちに与える第一の励ましは、勇気と希望です。

しかし、その次に、かれは、自己防衛と成長のために欠くことのできない。いくつかの手段を考えさせてくれます。最近発布されたラジオ（教育方針に添う養成の規準）を見ますと、なるほど思い当たるのです。なぜなら、これらの手段は、現代にもよくマッチしているからです。

では、その手段について考えてみましょう。

第一の手段。これは、夢に含まれている沢山の教訓を「終生養成」によって具体化することにあります。あの白衣の青年の言葉をここに掲げて見ましょう。

「よく聞いて、よく理解しなさい」、「前もって予防して、説教しなさい」、「あなたたちが説教していることを、常に守りなさい。あなたたちの行いが光となることが出来るように」、「伝統を愛し、これを後の世代に伝えなさい」。

第二の手段。これは、新しい召し出しへの心使いと若い会員の養成にあります。それは、次の言葉によって思い出させます。「修練者を受け入れる時は、慎重（しんちょう）にし、強く要請しなさい」。「誓願を許す時は、賢明にしなさい」、「みなを試して見て、よい人だけを受けなさい」、「軽薄な人、意志の変わり易い人は除外しなさい」。

第三の手段。これこそ、最後の偉大な手段で、それは、創立者に対する忠実です。この忠実の具体的な方法は、毎日、会憲を理解し、愛し、実行することです。したがって、「朝なに、夕なに」これについて反省し、個人的にも共同体的にも会憲を中心としなければなりません。

今日のサレジオ会員、また、各支部の共同体は、これらの忠告を受け入れているのでしょうか？

本会の行く末を思うとき、この質問は謎に満ちていて、心配のたねとなるのです。ドン・ボスコは、誰よりも先にこの問題を心配しました。かれがこの夢を見た1881年は、かれの晩年でし、イタリアでは教皇領土が奪われ、教会は、新たな、大きな困難に当面して悩んでいました。こんな時代であって見れば、始まったばかりのサレジオ会です。創立者が亡くなくても、修道会は存続できるのでしょうか？これは、確かに無意味な質問ではありませんでした。

はたして、ドン・ボスコが亡くなると、わたしたちも知っているように、教皇レオ十三世のとき、サレジオ会をスコピ会と合併させる提案が出されています（68）。

これらのことを考え合わせると、あの夢は、十九世紀の終わりから二十世紀の初めにかけてのサレジオ会の存続を具体的な予言の形で、確かに保証していたのです。

それでサレジオ会員の最初の世代は、この夢の記録を、予言のように考えて読んでいました。夢には、いろいろの年代が書かれてあったことから、なおさら予言的な解釈がなされました。事実、普通に、この夢は、サレジオ会の未来に関する夢と呼ばれています。この点から見ると、この夢は、わたしたちにとっても興味深いものです。それは、本会の使命と、その行く末を知るよすがとなるからです。

本会の使命の同一性とその将来、言い換えると、忠実とその未来は、一つの使命によってお互いに固く結ばれています。このような反省は、いろいろな方法ですることが出来ます。その反省の一つは、信仰深いユートピアのように思われます。

このような反省を、あの当時、教皇ピオ九世とドン・ボスコ自身がしたことがあります。例えば教皇ピオ九世は、その司牧的な直感を持って、予言者のような話し方で、ドン・ボスコのカリスマは現代にマッチしたオリジナルなものであるという意味のことを、言った事がありました。その時、即ち一八七七年、教皇は、神の人としての鋭い感受性を持って、ドン・ボスコに言いました。

「わたしがこれから予言することを、あなたは、あなたの子らに書いてください。この会は、奇跡的に広がり、未来数世紀にわたって長く続くでしょう。《……》それは、本会が、信仰と信心の精神、特に道徳と貞潔の精神を促進するときまでです」（69）と。

さて、ドン・ボスコも、この夢を、はっきり区別された二つの段階で予言的に解釈しました。一つは、教皇ピオ九世と同様に、本会が数世紀にわたって続くだろうという解釈。もう一つは、数十年の近い未来についての予言です。かれが、この解釈をなし得たのは、天からのインスピレーションを受けて、本会の使命は神から送られ、新しい社会

に役立つため、発展するものであるという、予言的な確信があったからです。

第一の段階における夢の解釈についていえば、ユートピア的なドン・ボスコのいろいろな断言があります。これらの断言は、かれが神から間違いなくインスピレーションを受けたのであるという確信が、わたしたちになければ、信じられないほどのものです。

或る日ドン・ボスコは、こう言いました。

「今いっしょに住んでいるサレジオ会員の内の約五十名ほどを、もし生きたまま保存できるとしたら、500年後のサレジオ会を見てみ摂理が、本会のために、どれほど素晴らしい繁栄を準備しておられたかに驚くでしょう。もちろんそれは、本会が自分の使命に忠実であるという条件のもとにです。《……》あるときは、頭の狂った人たちが本会の亡びを望むこともあります。しかし、その人たちの計画は、孤立したもので、だれの助けもそのために得られません。やはりこれも、サレジオ会員が「楽な生活にあこがれて、労働をやめる」というようなことがないという条件のもとにです」(70)と。

第二の段階における解釈では、数多くの断言と、いくつかの夢があります。この夢の中には、人間的には説明できないほどの具体的な指示と正確な断言があります(71)。

ドン・ボスコは、自分でも、サン・ベニニオで見たダイヤモンドの夢を、「本会の未来を現す夢」と考えていました。この夢には、年代も読まれ、第一の場面には、1881年、第二の場面には、1900年と書いていました。この夢の後で、ドン・ボスコが、「覚え書」に書いた次の言葉があります。

「なおこの上に、さし迫った沢山のとげがあり、数多くの苦労もあるが、その後に大きな慰めがある。一八九〇年頃には、激しい心配があり、一八九五年頃には、大きな勝利を得られるだろう」(72)と。

事実、サレジオ会員は、最初の二十年間、健康をよく保ち、従って他の修道会に合併されるようなことはありませんでした。そればかりか、全世界に向かって、見事な発展を遂げたのです。その発展振りは、教皇パウロ六世が、「教会の過去一〇〇年間に表われた現象は、「サレジオ会という現象」であったと認めねばならない」と感嘆されたほどでした。

夢の五十周年に当たって、ドン・リナルディは、この夢の記録を1930年の最高評議会公報の12月号に出版させました。ドン・リナルディがこれを印刷したのは、ドン・ボスコがこの夢をわたしたちへの教訓のために、また、サレジオ会の将来の発展のために伝えたいと切に望んでいたことを、知っていたからです。

印刷した文章は、「ドン・ボスコが書いた原文のままですが、年号に関するドン・ボスコの個人的な考えだけが省略されています。それは、これらの年号が、既にその時過ぎ去っていたので、この夢その物までも、その価値を失ったと、考える人が有った為でした」。 73

この印刷のおかげで、この夢は、いつの時代にも通用する生きたメッセージとして働きつづけ、本会の未来のために教訓となりました。結局、わたしたちは、今でもこの夢の教訓を立派に活用して、誠のサレジオ会員をこれによって確かめうるのです。従って、現代における今日でも、この夢に言われていることをよく注意し、理解しなければなりません。

わたしは、本会の将来について考えるもう一つの方法を「兄弟を力づける」という回書(74)の中で勧めました。

この回書を書きながら、わたしは、今の危機について、その意味を正しく読み取ろうと努力しました。なるほど、教会には聖霊が大切な恵みを与えておられますが、それと同時に、会員が迷ってしまう現象も考えねばならないのです。この現象を理解するうえでこのダイヤモンドの夢は、大いに役立ちます。

この夢では、第一の場面と、第二の場面のコントラストが非常にドラマチックです。これは、昔からよく言われている「善人の墮落は恐ろしい」ことを表わしています。不幸にして、わたしたちも、正反対のサレジオ会員《いわゆる偽サレジオ会員》の例を、何人も、しかも、抽象的にでなく、具体的に見てしまったのです。

御覧なさい、サレジオ会が遭遇している危険は、空想的なものではありません。ところで、初代において、あれほど大切にされていた本質的なもの、例えば、「労働」「節制」は、ドン・ボスコの時代のように、今もその重大さが認められ、守られているのでしょうか？

また、超自然的な雰囲気と純粋に司牧的な活躍、つまり神の霊の賜物である愛は、今もまだわたしたちの活動の魂となっているでしょうか？また、わたしたちの支部の日々の雰囲気になっているでしょうか？

果たして、わたしたちの全ての活躍は、修道的従順によって支えられているでしょうか？

今も、わたしたちは、健全な規律と犠牲心が、キリストの清く、貧しく、従順な、真の弟子となるために、欠く事のできないものと考え続けているのでしょうか？

百年も前のこの夢は、今日のわたしたちに、なんと大きな響きを、持っていることでしょうか。なぜなら、あの当時サレジオ会を襲っていた危険は、さらに厳しく、今日において実現しているからです。それで、わたしたちは、個人としても、共同体としても、忠告に満ちたこの夢をよく黙想しましょう。

夢の第三の場面に登場するあの若者の熱烈な呼びかけに答えて、よく反省しましょう。

特に、わたしたちの使命の価値を熱心に研究し、大切に、よく守り育て、これを忠実に伝えましょう。

また、本会の使命がこれほどの発展を遂げたのは、天からの恵みであることを絶えず心に留めて、感謝しましょう。夢の最後の場面に言われた聖書の言葉で、心から歌いましょう。

「主よ、光栄を帰せよ、われらにはではなく、われらにはではなく、あなたのみ名に」(詩篇 115・1)。

会員みなさん、この夢は小さな霊的遺産のようなものです。わたしたちは、今こそのことをよく念頭において、黙想し、実行に励まねばなりません。

夢の第三の場面に叫ばれたあの若者の励ましを、わたしたちに呼びかける、現代の大勢の若者たちの声として、考えましょう。

サレジオ会の使命は、神が若者のために起されたものです。そして、ドン・ボスコも、神からの若者への贈り物、青少年の友です。それでかれは、キリストが若者にお示しになる特別な愛の印であり、運び手であります。若者は、ドン・ボスコの友情をどんなに必要としていることでしょうか。

神はわたしたちを取り囲む若者にサレジオ会の使命を、ある意味で、権利とも、遺産としてお与えになりました。すなわち、キリストとマリアが本会のこの使命を若者のためにお望みになったという意味です(75)。では、ドン・ボスコが九歳の時に見たあの夢を思い出しましょう。わたしたちは、健全な生命力によって証明される、もっとも純粋な価値をもつ本会のこの使命を、若者に捧げる必要があります。

ダイヤモンドの夢を記念するこの百周年に際して、大いに、この夢を思い出し、その意味を深く掘り下げ、こうして、その中に含まれている教えと忠告を大切にしましょう。

ドン・ボスコは、あの夢の前に、ちょうど聖母の典礼記念を行なっていました。それで、聖母マリアが、わたしたちをも導き助けてくださいますように。

毎日の聖体拝領とロザリオの祈りの時、みなさんのために祈ることを約束して、心からの挨拶を、ひとりひとりに送ります。

尊敬と愛をこめて

ドン・E・ヴィガノ

注

- ・ ACS (サレジオ会最高評議会公報) 第 55 号 1930 年 923 ページ。
- ・ 同 上 924 ページ。
- ・ MB 第 15 巻 182 ページ。
- ・ P.STELLA 著「カトリック宗教心の歴史におけるドン・ボスコ」第 2 巻 527 ページ。
- ・ MB 第 15 巻 182 ページ。
- ・ 「アルベラ神父の回書」 1965 年版 370 ページ。

- ・ ACS 第 23 号 1924 年 197 ページ。第 55 号 1930 年 923-924 ページ。
- 第 56 号 1931 年 933 - 934 ページ。第 57 号 1931 年 965 ページ。
- ・ ACS 第 23 号 1924 年 200~203 ページ。
- ・ ACS 第 55 号 1930 年 925 - 930 ページ。
- ・ ACS 第 23 号 1924 年 175 ページ。
- ・ ACS 第 23 号 1924 年 174 ページ以下。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 933 ページ以下。
- ・ ロメロ著「ドン・ボスコの夢」。本書の 3 ページの注意参照。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 934 ページ。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 934 ページ。
- ・ ACS 第 57 号 1932 年 965 ページ。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 933 - 934 ページ。
- ・ ACS 第 55 号 1930 年 923 ページ。
- ・ 同上。
- ・ 会憲第 49 条。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 934 ページ。
- ・ 同上。
- ・ ACS 第 298 号 1980 年 679 - 680 ページ参照。
- ・ ACS 第 23 号 1924 年 184 ページ。
- ・ ドン・リナルディの引用による（ACS 第 23 号 1924 年 184 ページ）。

MB 第 13 卷 82 - 83 ページ参照。

- ・ 特別総会議事録 729 ページ。
- ・ 会憲第 42.43.87 条参照。
- ・ MB 第 12 卷 466~467 ページ。
- ・ 「神愛論」第 7 編第 7 章（全集第 5 卷 29 - 32 ページ参照）。
- ・ ACS 第 290 号 1978 年。
- ・ LG（教会憲章）46。
- ・ ヨハネの第一の手紙 5・4 参照。
- ・ 会憲第 47 条参照。
- ・ 会憲第 43 条参照。
- ・ 「アルベラ神父の回書」1965 年版 372 ページ。
- ・ 会憲第 40 条。第 41 条と第 48 条も参照。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 934 ページ。
- ・ MB 第 10 卷 1059 ページ。
- ・ MB 第 17 卷 890 ページ。
- ・ MB 第 12 卷 459 ページ。
- ・ 会憲付録（イタリア語版）237 ページ。
- ・ MB 第 2 卷 298 ページ以下。
- ・ 会憲第 3 条。
- ・ 会憲第 34 条と第 50 条。
- ・ P.STELLA 著「カトリック宗教心の歴史におけるドン・ボスコ」第 2 卷 402 - 407 ページ参照。

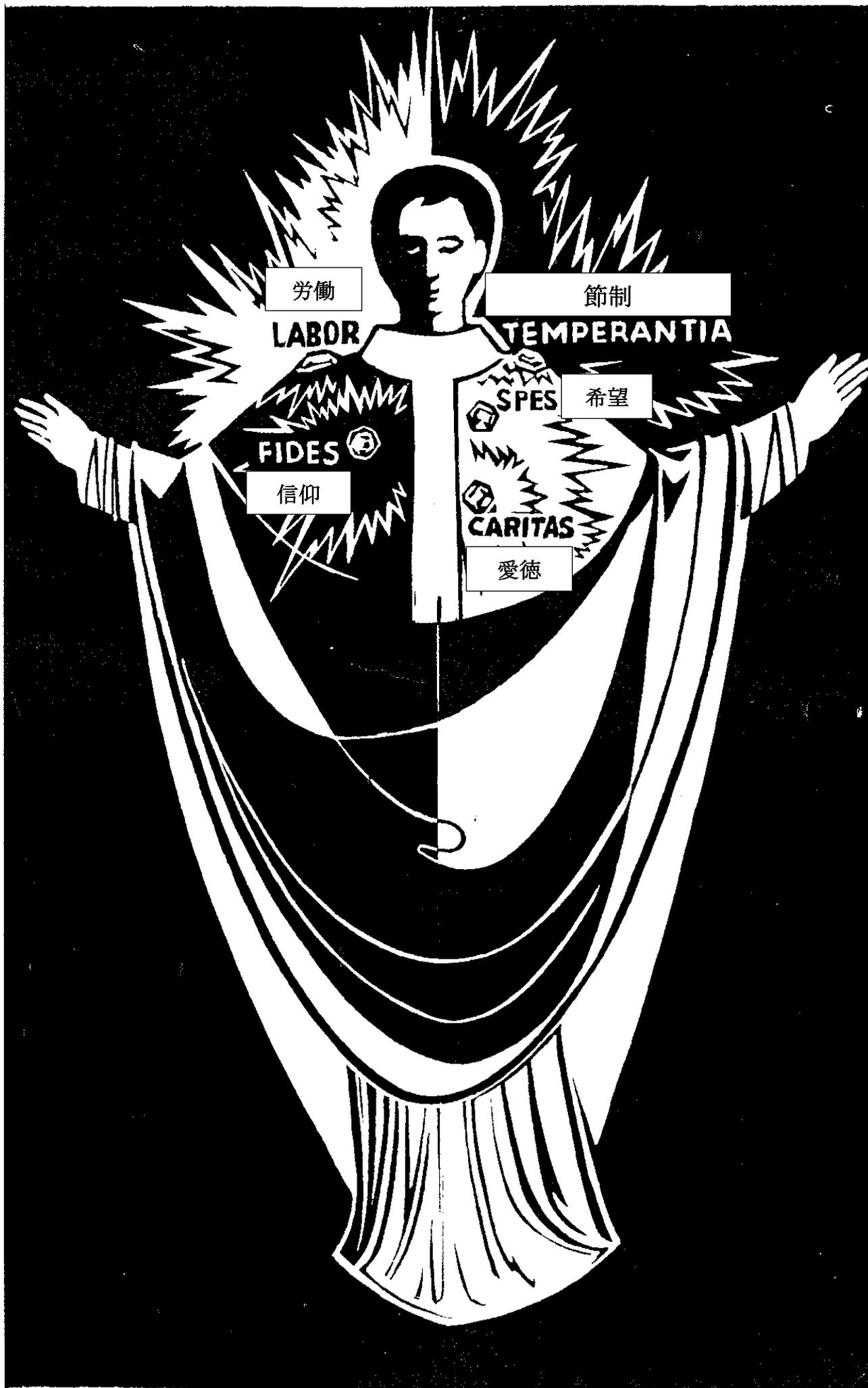
- ・ 同上。 227 - 240 ページ参照。
- ・ 会憲第 51 条。
- ・ MB 第 14 卷 549 ページ。
- ・ MB 第 15 卷 682 ページ。
- ・ 同上。
- ・ MB 第 10 卷 1046 ページ。
- ・ 会憲第 81 条。第 82 条と 83 条も参照。
- ・ MB 第 5 卷 675 ページ。
- ・ 会憲第 87 条参照。
- ・ プエブラ会議の議事録 1152 。
- ・ バラの通路の夢 (MB 第 3 卷 32 ページ以下 参照。
- ・ 会憲付録 (イタリア語版) 241 ページ。

57b 会憲第 42 条。

- ・ 会憲付録 (イタリア語版)、会憲序文 256 - 257 ページ。会憲序文の日本語訳は 1969 年日本管区長館発行の「会憲・会則」 11 - 81 ページにあり、この引用は 80 ページにある。
- ・ MB 第 6 卷 442 ページ。
- ・ MB 第 5 卷 554 - 556 ページ。
- ・ ACS 第 55 号 1930 年 923 ページ。
- ・ ACS 第 55 号 1930 年 924 ページ。
- ・ ACS 第 56 号 1931 年 934 - 935 ページ。
- ・ ドン・リナルディの回書。 ACS 第 55 号 1930 年 924 ページ。
- ・ MS 第 17 卷 385 ページ。
- ・ ACS 第 295 号 1980 年参照。
- ・ ACS 第 295 号 1980 年 403 ページ。
- ・ E・チェリア著「サレジオ会年代記」第 1 卷 747 - 748 ページ参照。
- ・ ACS 第 23 号 1924 年 184 - 185 ページ。
- ・ MB 第 17 卷 645 ページ。
- ・ 例えば車の夢 (MB 第 6 卷 897 ページ以下) 参照。
- ・ MB 第 15 卷 187 ページ。
- ・ ACS 第 55 号 1930 年 923 ページ。
- ・ ACS 第 295 号 1980 年。
- ・ MB 第 1 卷 123 ページ以下。

(デルコル神父 訳)

2006 年 8 月 改訳



労働

節制

LABOR

TEMPERANTIA

SPES

希望

FIDES

信仰

CARITAS

愛徳



貞潔

清貧

CASTITAS PAUPERIAS

OBEDIENTIA

従順

JEIUNIUM

PRÆMIUM

断食

報い